

初版『資本論』「価値形態」の研究(1)

尼 寺 義 弘

はじめに

マルクスは初版『資本論』「序文」においてつぎのように述べている。

「なにごととも初めが困難だということは、どの科学の場合にも言えることである。したがって、第1章、ことに商品の分析を含む節の理解は最大の困難となるであろう。さてもっと詳しく、価値実体と価値量との分析について言えば、私はこの分析をできるだけ平易なものにした。〔価値形態の分析はそうはいかなかった。それまでの叙述¹⁾よりも弁証法²⁾がはるかに鋭くなっている、それは難解である。したがって私は、弁証法的思考にそれほど習熟していない読者には、15ページ(上から19行目)から34ページの終りまでの部分を全部ぬかし、そのかわりに本書につけた付録——「価値形態」——を読まれるようおすすめする。ここでは、事柄を、その科学的な理解が許すかぎりできるだけ単純に、また学校教師風にさえ叙述するよう努めている。付録を読み終えたら、読者は本文にかえて、35ページからまた読み続けてよい。〕³⁾

貨幣形態をその完成した姿とする価値形態は、非常に無内容で単純である⁴⁾。それにもかかわらず、人間精神は2000年以上もまえからそれを解明しようと努めながら果さなかったのに⁵⁾、他方では、これよりもずっと内容豊富で複雑な諸形態の分析に、少なくとももだいたいのところまでは、成功したのである。なぜだろう

か？ それは、発達した身体は身体細胞よりも研究しやすいからである。そのうえ、経済的諸形態の分析では、顕微鏡も化学的試薬も役にはたさない。抽象力が両者の代わりをしなければならない。ところが、ブルジョア社会にとっては、労働生産物の商品形態または商品の価値形態が経済的な細胞形態なのである。教養のないものには、この形態の分析は、ただいたずらにこまかいせんさくだてをするように見える。じっさい、そこではこまかいせんさくだてが肝要なのだが、しかし、それはちょうど、顕微解剖でそのようなせんさくが肝要であるのと同じことなのである。

したがって、この価値形態に関する一節を別とすれば、本書を難解だと言って非難することはできないであろう。もちろん、私が予想している読者は、なにか新しいことを学ぼうとし、それゆえまた自分自身で考えようとする人々なのである。〕⁶⁾

上述のように初版『資本論』〔以下、『初版』と略記する〕第1章「商品と貨幣」のうち商品の分析を含む最初の節は、『資本論』の叙述の端初であり、その理解は最大の困難をとまうものである。なかでも価値形態の分析は平易にされた価値実体と価値量のそれと異なり、前の著作『経済学批判』よりも「弁証法」がはるかに鋭くなっている。だからその理解はきわめて困難である。このようにマルクスは述べ、「弁証法的思考」に不慣れな読者にたいし「本文」の「価値形態」として「付録」のそれを読むようにすすめている。「付録」の「価値形態」

は「科学的な理解が許すかぎりできるだけ単純に、また学校教師風にさえ叙述するように努めている」のである。だからその理解は「本文」よりも容易となるであろう。

さらにマルクスは価値形態の分析の困難を研究対象の性格および研究方法との関連で述べている。すなわち、(1) 身体細胞の研究が身体のそれよりも困難であるように、ブルジョア社会の経済的な細胞形態である商品の価値形態の分析は具体的な形態のそれよりも困難である。価値形態の分析は、身体の研究がその細胞の分析なしにはありえないように、ブルジョア社会の経済的構造の研究にとって不可欠のものである。(2) 経済的諸形態の分析では、顕微鏡や化学的試薬のような分析用具はいっさいなく、ただ頭脳の「抽象力」だけがいわば分析用具である。

このように価値形態に関する節は難解である。本稿は「弁証法」がはるかに鋭くなっているとマルクスの述べる初版「本文」のその分析をおこなう。その検討をとおして価値形態の弁証法とは何かについても考察する。

「本文」の「価値形態」の叙述形式は、ヘーゲルの『エンチクロペディー』のような形式をもつ「付録」のそれとは全く異なっている。それは「見出し」も見出しによって指示される「移行規定」もない。長文あり短文ありでその把握は困難をとまなうが各パラグラフごとに逐一検討を加える。

われわれはまずその準備としてマルクスとエンゲルスが「価値形態」について当時どのように考えていたかをイメージとして浮きだたせることにしよう。そのためには両者の手紙のやりとりをみることからはじめなければならない。

注

- 1) カール・マルクス『経済学批判』(1859年、初版)をさしている。
- 2) 「弁証法」がはるかに鋭くなるとは、のちにみるように、価値表現の回り道にもとづく両極の形態規定〔ヘーゲル風にいえば反省規定〕と価値形態の「展開・移行」の叙述をさすものといえよう。
- 3) 「付録」の論点は第二版『資本論』では「本

文」へとり入れられている。したがって〔 〕で示した『初版』読者への指示は『第二版』以降では削除されている。

- 4) 「価値形態は、非常に無内容で単純である」は、のちの「これよりもずっと内容豊富で複雑な諸形態」に対応している。価値形態は、「経済的な細胞形態」といわれているように、きわめて抽象的である。しかも内容ではなくてその形態が問題なのである。だからこそ分析が困難である。

これは『初版』「本文」の「I. 第1の、または単純な相対的価値の形態」の最初の部分を参照されたい。そこではつぎのように述べられている。

「この形態〔第1の形態〕は単純であるがゆえに分析するのがいささか困難である。それに含まれている異なった諸規定はおおい隠されており、未展開であり、抽象的であり、したがってまた若干の抽象力を働かせることによってのみ、区別され確保されることができるのである」Marx, *Das Kapital*, Bd. I, 1. Auflage, S. 15.

- 5) 「人間精神は2,000年以上もまえからそれを解明しようとなつながら果さなかった」とは、アリストテレスのような天才といえども価値形態を容易には理解できなかったということであろう。「付録」の等価値形態の第3の特色の説明でこのことは述べられている。Marx, *Das Kapital*, Bd. I, 1. Auflage, S. 772-773.
- 6) 「抽象力」は自然科学で用いられる「顕微鏡」や「化学的試薬」に対応している。それは複雑な具体的諸事実から分析の対象となっている当の事実の一側面を浮きだたせ、「純化された事実」とすることである。

見田石介氏は抽象についてつぎのように述べている。

「抽象は非本質的なものの捨象ではあるが、それはたんに偶然的なものの捨象だけをいうのではない。偶然的なものの捨象も、分析にとって必要な前提であるが、より本質的には、分析しようとする当の事態そのものより具体的な諸形態を捨象して、事態を単純化することをいうのである。」見田石介「資本論の方法」見田著作集第四巻、所収、大月書店、1977年、同書36ページ。

したがって「抽象力」のない人には経済的諸形態の分析はできないし、その分析の意義も理解することはできないということであろう。

なおこの点については、久留間鏡造『貨幣論』大月書店、1979年、153-154ページ、157ページ。参照。

- 7) Marx, *Das Kapital*, Bd. I, 1. Auflage, S. VIII-IX.

I 価値形態論をめぐるマルクスとエンゲルスの往復書簡

マルクスとエンゲルスが価値形態について当時どのように考えていたかをみるためには、『初版』「付録」に対する両者の態度の差異をみることによってよく理解できる。

初版『資本論』は、周知のように、「価値形態」について「本文」と「付録」に二重の叙述をもっている。その成立事情は第二版『資本論』「後記」によって明らかであるのでそれを取りあげよう。

「初版の読者には、まず第1に、第二版で加えられた変更について報告しておかなければならない。……本文そのものについて言えば、次の点が最も重要である。

……第1章第3節(価値形態)は全部書きかえたが、これはすでに初版の二重の叙述から見ても必要なことだった。——ついでに言えば、この二重の叙述は、私の友人であるハノーヴァーのドクトル・L・クーゲルマンにすすめられて書いたものである。1867年の春、私が彼のものを訪れていたとき、最初の校正刷がハンブルクからきた。そして、彼は、大多数の読者にとっては価値形態の補足的な、もっと教師的な説明が必要だということを、私に納得させたのである。』¹⁾

このように『初版』「付録」はクーゲルマンにすすめられて書いたものである。彼は「本文」の価値形態をみて「価値形態の補足的な、もっと教師的な説明が必要だということを」マルクスに納得させたのである。それは1867年の春「4月17日ごろから5月15日までクーゲルマンの家に滞在」²⁾であった³⁾。

マルクスはクーゲルマンのすすめる「補遺」について同年6月3日づけの手紙でエンゲルスに意見を求めている。

「それは〔『資本論』第1巻の最初の5ボーゲンの校正刷は〕8日や10日は君の手もとに置いてもいいが、そのさいに、価値形態の叙述のなかでどの点をとくに俗人のために補遺(Nachtrag)で平易にするべきかについて君の意見を、ぜひくわしく知らせてくれたまえ。』⁴⁾

エンゲルスは同年6月16日づけの手紙でつぎのように答えている。

「1週間前から、ゴットフリート〔・エルメン〕君とのいろいろな喧嘩やそのほかのつまらん事件や妨害に邪魔されて、価値形態を勉強するだけの落付きをもつことがほとんどできなかった。そうでなければ、数ボーゲンをとくに返送していただろう。第2ボーゲンはことに疔に悩まされた痕跡を帯びている。だが今となってはもう改めるわけにはいかないし、また補遺でこれ以上それについて書くこともないと思う。というのは、俗人はなんといってもこの種の抽象的思考に慣れていないし、たぶん価値形態のために苦勞してはくれないだろうから。せいぜい、ここで弁証法的に得られた結果がもうすこしくわしく歴史的に実証され、いわば歴史によってそれが吟味されればよいだろう。もっともそれについては、いちばん必要なことはすでに述べられてはいるのだが。君はこれにかんする材料をたくさんもっているのだから、おそらくそれについてまったく適切な付論(Exkurs)、つまり俗人のために歴史的な方法で貨幣形成の必然性とそのさい生じる過程とを実証する付論を書くことができる。

君のやった大きな失策は、これらのより抽象的な展開の思考の歩みを、もっと細かい区分と別々の見出しとでわかりやすくしなかったことだ。君はこの部分を、ヘーゲルのエンチュクロペディーのようなやり方で、短い段落で取り扱い、それぞれの弁証法的な移行を特別の見出しで目だたせ、できればすべての付論と単なる例解は特別の書体で印刷すればよかったのだ。そうすれば、いくらか学校教師じみたかもしれないが、非常に大きな部類の読者にとって理解が

根本的に容易にされたことだろう。民衆は、学識のあるものでも、まさしくこういう思考の仕方には、もうまったく慣れていない。だからわれわれは、彼らにできるかぎりわかりやすくしてやらなければならないのだ。

以前の叙述『『経済学批判』(ドゥンカー)にくらべれば、弁証法的展開の鋭さにおける進歩は非常に顕著だが、叙述そのものでは僕には最初の姿のほうがよりよく思われる点もある。まさにこの重要な第2ボーゲンが疔の圧迫に悩んでいるのは、非常に残念だ。しかし、もうすこしも改めるわけにはいかない。そして弁証法的に考える能力のあるものにはそれでもわかるのだ。』⁹⁾

エンゲルスの述べていることを要約するとつぎのようになるであろう。

(1) 価値形態を論じている第2ボーゲンが、疔の圧迫に悩んでいるのは非常に残念だが、すでに校正刷が出ている今となってはもはやそれを改めるわけにはいかない。また価値形態に関する弁証法的な理論的展開を「補遺」でさらにすすめる必要はない。というのは俗人は「価値形態」のような「抽象的思考」に慣れていないし、そのための苦勞もしてくれないであろうから。

(2) しかしもし何かを書きくわえるとすれば、「弁証法的に得られた結果 (dialektisch Gewonnene) がもうすこしくわしく歴史的に実証され、いわば歴史によってそれが吟味されるものが必要であろう。すなわち「俗人のために歴史的な方法 (historischem Wege) で貨幣形成の必然性 (die Notwendigkeit der Geldbildung) とそのさい生ずる過程とを実証する付論」である。

(3) 「本文」価値形態の大きな失敗は、抽象的に展開されている思考の歩みを「もっと細かい区分と別々の見出し」でわかりやすくしなかったことにある。広範な読者に理解できるように、ヘーゲルの『エンチュクロペディー』のやり方で、a)「短い段落」にし、b)「弁証法的な

移行 (dialektischen Übergang) を特別の見出しで目だたせ、c) できることなら「すべての付論と単なる例解は特別の書体で印刷すればよかった」。そうすれば、読者にとっておおいにわかりやすくなったであろう。

(4) 前著の『経済学批判』にくらべて弁証法的展開⁹⁾ (dialektischen Entwicklung) の鋭さはいちじるしいが、叙述そのものでは前著の方がよく思われる点もある。エンゲルスはこのように『経済学批判』の叙述の仕方を評価しているようである。したがって、のちにみるように、この時期にはエンゲルスは初版「価値形態」の意義を充分には理解していなかったといえよう。

エンゲルスの上述の考えに対してマルクスは同年6月22日づけの手紙で自信をもってつぎのように答えている。

「価値形態の展開にかんしては、君の忠告に従ったし、また従わなかった、この点でも弁証法的にふるまうために。すなわち僕は、第1に、一つの付録 (Anhang) を書いた、そのなかでは同じことをできるだけ単純に、そしてできるだけ学校教師風に述べる。そして第2に、君の忠告に従って各前進命題をそれぞれ § § 等々を使い、別々の見出しで区分した。それから序文のなかで『弁証法的でない』読者に、x—y ページはとばしてそのかわりに付録を読むように、と書く。相手にするのは俗人ばかりではなく、知識欲のある青年などもある。その上、事柄はこの本の全体にとってあまりにも決定的だ。経済学者諸君は、これまで次のようなきわめて単純なことさえも見落としてきた。すなわち、20エレのリンネル=1着の上着 という形態は 20エレのリンネル=2ポンド・スターリングの未展開な基礎にほかならないということ、したがって、商品の価値がまだ他のすべての商品にたいする関係としてではなく、ただその商品自身の自然形態から区別されたものとして表現されているにすぎない最も単純な商品形態が、貨幣形態の全秘密を、したがってまた、

つづめて言えば、労働生産物のすべてのブルジョア的形態の全秘密を含んでいる、ということだ。僕は最初の叙述〔『経済学批判』(ドゥンカー)では、価値表現が展開して貨幣表現として現われるにいたってからはじめて価値表現の本来の分析を与えるということによって、展開の困難を避けたのだ。〕⁷⁾

マルクスは「弁証法的でない」読者のために、つぎのように努力を傾注している。

(1) 「一つの付録」を書いている。エンゲルスが「補遺でこれ以上それについて書くこともない」と述べたにもかかわらずである。「付録」は「本文」と同じことをできるだけ単純に、学校教師風に述べている。

(2) エンゲルスのすすめにしたがい各前進問題を〔§ §〕とか、〔a), b), c)〕とか、〔 α), β), γ 〕とかの記号を用い、別々の見出しで区分している。

こうしてマルクスはエンゲルスに対して「弁証法的に」ふるまったのである。

以上のことはマルクスが価値形態論を何としても広範な読者に理解してもらわねばならないという学問上の積極的な姿勢のあらわれとみるべきであろう。すなわち経済学者たちが見落としてきた「20エレのリンネル=1着の上着」という表現形式に代表される商品の価値形態は『資本論』全体にとって決定的に重要である。というのは労働生産物のすべてのブルジョア的形態の「全秘密」が最も単純な商品形態に隠されているからである。だから価値形態論は、エンゲルスの述べるように、抽象的であり、俗人がその理解のために苦勞してくれないとしても、「付録」でできるかぎり単純にかつ学校教師風に叙述することによって「知識欲のある青年」だけにでも理解してもらいたいというマルクスのやむにやまれぬ努力のあらわれであろう。

それにしても不可解なことはエンゲルスの主張した「俗人のために歴史的な方法」で貨幣形成の必然性を説明する「付論」を書く要請に対してマルクスが何ら答えていないことである。たしかに「付録」は「本文」にみられない歴史的

的な事実による説明とか歴史的な方法に類する叙述が若干ある⁸⁾。だがマルクスの意図するのは、「付録」が「本文」の弁証法的展開の鋭さをできるかぎり広範な読者に理解できるように単純化し、教科書のようにわかりやすくしたというその意味での理論上の成果をもっているとみるべき点にあるであろう。したがってエンゲルスの主張する「歴史的に実証され」るべき「付論」という考え方は斥けられたものといえるであろう。この時期における両者の価値形態論に対する理解の相違がここにみられる。マルクスが『経済学批判』にみられなかった貨幣形成における価値形態論の理論上の意義をきわめて重視していることがわかるのである。

エンゲルスは「付録」について直接にふれていないが同年6月24日づけの手紙で「価値形態」についてつぎのように述べている。

「僕の楽しみは、経済学者諸君が前述の二つの箇所〔初版『資本論』第2章「貨幣の資本への転化」と同第3章「絶対的剰余価値の生産」〕まで読んできたときの彼らのあわてぶりだ。価値形態の展開はたしかに全ブルジョアの汚物の即自(das An-sich der ganzen bürgerlichen Schmiere)だが、革命的な帰結はまだあまりはっきりとは現われていない。そして人々はこれらの抽象的な事柄ではまだ比較的気楽にすり抜けて、きまり文句を言うことができる。だが、それもここまでのことで、事態は白日のように明らかなのだから、これにたいして彼らはなんとと言えるか、僕にはわからない。」⁹⁾

エンゲルスはこのように「叙述からみても内容からみても、それまでの頂点をなしている」¹⁰⁾貨幣の資本への転化や剰余価値の発生にかんする諸章に比べて、価値形態の展開は「たしかに全ブルジョアの汚物の即自だが、革命的な帰結」といえるほどはっきりとそれは現われていないと述べている。

マルクスは同年6月27日づけの手紙で「付録」の取り扱いについて述べている。

「付録の取り扱いではどんなによく君の忠告に従ったかを見てもらうために、この付録の区分けや、§〔項目〕や、表題などをここに書き写しておこう。」¹¹⁾

こうしてマルクスはエンゲルスの忠告どおりの「細かい区分けと別々の見出し」をもつ「付録」の目次を送っている。

「付録」を書くことに消極的であったエンゲルスもその校正刷をみることによって満足した手紙を送っている。同年9月9日づけのものである。

「君の価値形態の付録について敬意を表したい。この形式では、それは、ひどくわかりの悪い人々でさえ十分に得心がゆくようになっている。」¹²⁾

以上のように、マルクスとエンゲルスの手紙のやりとりをとおして「価値形態」に対する両者の認識の相違から一致への過程をみえてきた。そこでは弁証法はどのように把握されていたのであろうか。

エンゲルスは、すでにみたように、同年6月16日づけの手紙で『初版』「本文」が『経済学批判』にくらべて「弁証法的展開の鋭さ」がいちじるしいことを述べている。

これに対してマルクスは6月22日づけの手紙で「最も単純な商品形態」の分析の重要性を強調している。この点、久留間鮫造氏も言われているように、エンゲルスは価値形態の形態Iから形態IVへの展開を念頭において「弁証法的展開」を述べているようであるのに対して、マルクスは価値形態の肝心かなめな点は単純な価値形態の分析にあり、「本来的にはそこで、自分は弁証法的にふるまっているのだ」¹³⁾と述べているかのようである。つぎにその分析をみることにしよう。

注

1) Marx, *Das Kapital*, Bd. I, (M-E-W, Bd.

23.,) S. 18.

2) Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, „Karl Marx und Friedrich Engels“ Daten aus ihrem Leben und ihrer Tätigkeit (1864-1870), M-E-W, Bd. 16., S. 720.

3) マルクスは同年5月7日づけのエンゲルスへの手紙で「僕は校正用の第1ボーゲンを一昨日、僕の誕生日に受けとった。」(*Marx an Engels, Brief vom 7. 5. 1867.*, M-E-W, Bd. 31., S. 296.)と述べている。

「1ボーゲンは印刷ページで16ページ※」であるから、第1ボーゲンは初版『資本論』第1章「商品と貨幣」第1節「商品」の端初から価値形態の本格的論究のはじまりまでを含んでいると思われる。したがって価値形態を含む第2ボーゲンは5月7日から5月15日までのあいだに受けとったのであろう。

※三宅義夫氏は『『資本論』準備原稿についての覚え書き』一、二(立教経済学研究第31巻第1号, 同第3号, 1977年。)という興味深い論文のなかで, „Grundrisse“ の「I 価値」と題する部分の経緯について探究されている。そこでマルクスの「執筆時期」とか, 「執筆速度」についても考証を加えられている。『初版』の成立事情について直接ふれておられないが, 本稿作成に参考となった。

4) *Marx an Engels, Brief vom 3.6. 1867.*, M-E-W, Bd. 31., S. 301.

5) *Engels an Marx, Brief vom 16.6. 1867.*, M-E-W, Bd. 31., S. 303-304.

6) 久留間鮫造氏は「弁証法的展開」についてつぎのように言われている。「これはおそらく、エンゲルスが『経済学批判』にくらべて弁証法的な展開の鋭さにおける進歩が顕著だ、と言っている場合、彼は価値形態そのものの発展を念頭に置いてそう言っているらしいのにたいして、マルクスは、価値形態論の肝心かなめな点は単純な価値形態の分析にあるので、本来的にはそこで、自分は弁証法的にふるまっているのだ※、と言っているものようにぼくには思えるのです。」久留間『貨幣論』大月書店, 1979年, 160ページ。

※後述のマルクスのエンゲルスへの同年6月22日づけの手紙参照。

7) *Marx an Engels, Brief vom 22. 6. 1867.*, M-E-W, Bd. 31., S. 306.

8) 歴史的な事実による価値形態の説明としては、たとえば、付録「価値形態」の I. 「単純な価値形態」の §. 1. 「価値表現の両極」の b) 「両形態の分極性」を一つの例とみることができる。そこではつぎのことが論じられている。同じ商品が

同じ価値表現において同時に両方の形態〔相対的価値形態と等価形態〕で現われることはできない。そのこと具体例としてリンネル生産者Aと上着生産者Bとの直接的な交換取引をあげて説明している。この叙述は『第二版』以降には含まれていない。(Marx, *Das Kapital*, Bd. I, 1. Auflage, S. 765-766.)

また §. 3. 「等価形態」の c) 「等価形態の諸特色」の r) 「等価形態の第3の特色」において、アリストテレスによる価値形態の分析の失敗が「価値概念」の欠如にあること、それは根本的には彼の生きた社会の「歴史的限界」にあることを述べているのも学説史的な説明の一例といえよう。(Ebenda, S. 772-773.)

歴史的な方法による説明としては、たとえば §. 7. 「商品形態と貨幣形態の関係」(Ebenda, S. 776.)とか、 §. 9. 「単純な価値形態から展開された価値形態への移行」(Ebenda, S. 776-777.)とか、II. 「全体的なまたは展開された価値形態」の §. 5. 「全体的な価値形態から一般的価値形態への移行」(Ebenda, S. 778.)とか、III. 「一般的価値形態」の §. 5. 「一般的価値形態から貨幣形態への移行」(Ebenda, S. 781-782.)とか、IV. 「貨幣形態」の §. 3. 「単純な商品形態は貨幣形態の秘密である」(Ebenda, S. 783-784.)とか、における歴史的な説明の部分がその例としてあてはまるかもしれない。しかし上記の例は、本文でも述べたように、エンゲルスの主張する歴史的な方法による貨幣形成の説明とはいえないであろう。それはあくまで「価値形態」の単純な学校教師的な説明であるといえよう。

- 9), 10) *Engels an Marx, Brief vom 24. 6. 1867.*, M-E-W, Bd. 31., S. 308-309.
 11) *Marx an Engels, Brief vom 27. 6. 1867.*, M-E-W, Bd. 31., S. 314.
 12) *Engels an Marx, Brief vom 9. 9. 1867.*, M-E-W, Bd. 31., S. 341.
 13) 久留間綾造『貨幣論』160ページ。

II 初版『資本論』「価値形態」の分析

1. 導入部

周知のように初版『資本論』第1章「商品と貨幣」はつぎの三つの「節 (Abschnitt)」より成っている。

1) 商品 2) 諸商品の交換過程 3) 貨幣および商品流通

現行版『資本論』〔以下、『現行版』と略記する〕は「節」が「章 (Kapitel)」となっており、その第1部、第1編、第1章「商品」は四つの節に分かれている。

『初版』第1章、第1節「商品」は『現行版』のような分けはなされていない。しかしその理論内容と展開方法とをみるならば、『現行版』と同様に、第1節「商品」は四つの部分に分かれていることは明らかである。

『初版』「価値形態」の叙述にさきだつ商品の二要因、労働の二重性を論じたところで、『現行版』では削除されていてしかも重要と思われる部分を摘記しておこう注。

注

「第二版後記」¹⁾で述べているように、『現行版』は『初版』とくらべて「価値の導出」が厳密にされ、また価値実体と価値量の規定との関連も明確にされている。

『現行版』の第1節「商品の二要因」で、1クォーターの小麦 = a ツェントナーの鉄 という等式から価値の実体をみいだすところにあたる部分で『初版』はつぎのように述べている。

「したがって、諸商品は、それらの交換関係から独立して、またはそれらが諸交換一価値として現われるときの形態から独立して、まず諸価値そのものとして考察されねばならないのである。

諸使用対象または諸財貨としては、諸商品は物的に相異している諸物である。諸商品の価値存在 (Werthsein) はこれに反して諸商品の単位 (Einheit) をなしている。この単位は自然 (Natur) から生ずるのではなくて、社会 (Gesellschaft) から生ずるのである。種々異なる使用価値においてただ異なって表示されるだけの、共通の社会的実体 (Die gemeinsame gesellschaftliche Substanz), —それは労働である。²⁾

このパラグラフは、N・バーボンからの引用

を示す「注8」の直後に位置している。その内容は、つぎのとおりである。諸商品は使用価値としては互いに全く異なるものである。諸商品の価値存在（ここにはじめて「価値存在」という概念がでてくる——『現行版』ではまだ登場しない。）こそが 諸商品を統一する 共通な単位である。その単位は自然からではなく社会から、ブルジョア的な商品生産の社会から生まれるものである。しかしその根拠は明らかではない。そして諸商品においてさまざまに表現されるその単位の「共通の社会的実体」、それこそは「労働」である。このように述べるのであるが、諸商品を統一する単位である「価値存在」と「社会的実体」と「労働」との内在的な関係はいまだ明らかとはいえない。

このパラグラフの直後に『初版』は、『現行版』の第2節「労働の二重性」で論じられている単純労働と複雑労働の関係を述べている。

ところで、『現行版』は、二商品の等置から価値とその実体の導出および交換価値への復帰を簡単にみるとつぎのようにおこなっている。

「分析」 二商品の等置→商品の使用価値の捨象→労働の有用性の捨象→抽象的人間労働への還元

「総合」 抽象的人間労働（共通の社会的実体）の結晶＝商品の価値→交換価値⁹⁾

したがって『現行版』の叙述は、さきにもみた『初版』のそれとくらべてより厳密であることがわかる。

さらに、『現行版』では第1節の末尾にあたるパラグラフの直前で、『初版』はつぎのように述べている。

「われわれは今や価値の実体を知っている。それは労働である。われわれは価値の量の尺度を知っている。それは労働時間である。価値をまさに交換価値へと刻印づける価値の形態は、まだこれから分析されねばならない。とはいえ、その前に、すでに見いだされた諸規定がもう少し詳しく展開されなければならない。」⁴⁾

このように述べてマルクスは経済学の理解の「軸点」⁵⁾をなす労働の二重性の一層くわしい分析をおこなうのである。そして『現行版』第2節「労働の二重性」の末尾にあたるところで『初版』はつぎのように述べている。

「以上に述べたことからつぎのような結論が出てくる。すなわち、商品のなかには、もちろん二つの異なる種類の労働が含まれているわけではないが、しかし、同じ労働が、その労働の生産物としての商品の使用価値に関連してみられるか、それとも、その労働の単に対象的な表現としての商品価値に関連してみられるか、によって、異なって規定されるし、また、対立的にさえ規定される^注、ということはたしかである。商品は、価値であるためには、なによりもまず使用対象でなければならないのであるが、それと同様に、労働も、人間の労働力の支出として、したがってまた人間労働そのものとして、計算されるためには、なによりもまず有用な労働、すなわち目的を規定された生産的な活動でなければならないのである。」⁶⁾

この部分は商品の二要因である使用価値と価値、さらにそれらを生み出す異なる労働を区別の面からみるとともに両者の連関の面からもみているといえよう。

注

「対立的にさえ規定される」とは、労働の生産力の上昇による素材的富の増加に対してその富の価値量の同時的な減少が対応すること、あるいはまた、その逆のこと、すなわち労働の生産力の低下による素材的富の減少に対してその富の価値量の同時的な増加が対応することをいうのである。「このような相反する運動は、労働の二面的な規定から発生している。」⁷⁾

他方、『現行版』ではつぎのように二要因の区別の面を強調している。

「すべての労働は、一面では、生理学的な意味での人間の労働力の支出であって、この同等

な人間労働または抽象的人間労働という属性においてそれは商品価値を形成するのである。すべての労働は、他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間の労働力の支出であって、この具体的有用労働という属性においてそれは使用価値を生産するのである。』⁸⁾

またフランス語版『資本論』では、以下のように入れた形で叙述されている。

「上述の結果、次のことが生ずる。すなわち、厳密に言って、二種類の労働が商品のなかにあるわけではないが、労働をその生産物としての商品の使用価値に関連づけるか、または、その純粋に客体的な表現としての商品の価値に関連づけるかにしたがって、その商品のなかで同じ労働が自己とは反対のものになる、ということ。どんな労働も一方では、生理学的な意味で人間労働力の支出であり、この同等な人間労働という資格において商品の価値を形成する。他方、どんな労働も、特殊な目的によって規定されるなんらかの生産形態のもとでの、人間労働力の支出であって、この具体的な有用労働という資格において使用価値あるいは有用性を生産する。商品が価値であるためには、商品はなによりもまず有用でなければならないのと同じように、労働が人間労働力の支出、言葉の抽象的な意味での人間労働と見なされるためには、労働はなによりもまず有用でなければならない。』⁹⁾

以上のように『現行版』にない『初版』の叙述のうち重要と思われる部分をみてきた。商品の二要因、労働の二重性を分析したのちマルクスは価値の形態の考察に向かうのである。つぎにそれをみることにしよう。

注

- 1) Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 18.
- 2) Marx, *Das Kapital*, Bd. I, 1. Auflage, S. 4.

- 3) Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 52-53.
- 4) Marx, *Das Kapital*, Bd. I, 1. Auflage, S. 6.
- 5) Ebenda, S. 7.
- 6),7) Ebenda, S. 12-13.
- 8) Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 61.
- 9) *Le Capital*, par Karl Marx, Traduction de M. J. Roy, entièrement révisée par l'auteur, Paris, Éditeurs, Maurice Lachatre et C^{ie}, 1872-1875, p. 18. 江夏・上杉訳『フランス語版資本論』法政大学出版局, 1979年, 16ページ。

2. 価値——相対的価値(価値形態)

マルクスは述べている。

「これまではただ 価値実体と 価値量とを規定しただけであるから、今度は価値形態の分析に向かうことにしよう。

まず商品価値の第1の現象形態にふたたび立ち帰ろう。』¹⁾

こうして二つの商品——その生産に等しい労働時間を要する二つの商品、つまり同等な価値量をもつ二つの商品が例として取りあげられる。そして「40エレのリンネル=2着の上着」という価値等式が示される。すなわち、「40エレのリンネルは2着の上着に値する。」

われわれは二商品が等価であるということを示す上述の等式のなかに同時に、40エレのリンネルの価値が2着の上着で表現されていることを読みとることができる。このように一商品の価値が他商品の使用価値で表現される場合、一商品の価値は、その商品の「相対的価値(ihr relativer Werth)」²⁾と名づけられる。

このように商品の価値と相対的価値との関係を明らかにしたうえで、つぎにマルクスは相対的価値量の変動について述べている。

注

- 1),2) Marx, *Das Kapital*, Bd. I, 1. Auflage, S. 13.

3. 相対的価値量の変動

『初版』「価値形態」は、『現行版』と異なり、まず「相対的価値」の量的規定性が論じられている¹⁾。商品の価値量はそれを生産するのに必要な労働時間によって規定される。ところで、その生産に必要な労働時間は労働の生産力の変化によって変動する。したがって労働の生産力の変化がどのように価値量の変動に、したがってまた相対的価値量の変動に影響するのであろうか。それをマルクスは I—IV の四つの事例に分けて説明しているのである。これは『第二版』以降では、A)「単純な価値形態」の2.「相対的価値形態」の b)「相対的価値形態の量的規定性」において論じられている。その内容は各版本とも同様である²⁾。

このように『初版』の考察はまず二商品の価値関係のうちにその「量的関係」をみようとするものである。すなわち「一商品の相対的価値量の変動がどの程度までその商品自身の価値量の変動を反映しているか」³⁾を検討している。それは相対的価値の運動に関する「諸法則」⁴⁾を明らかにするものであるが、「それらの諸法則はすべて、諸商品の価値量はそれらの生産に必要な労働時間によって規定される、ということにもとづいているのである。」⁵⁾

さて『初版』は、相対的価値の「量的側面」の考察から「質的側面」の、「形態」の考察へと向かうのである。

注

1) 相対的価値量の変動を価値形態論の形成史という観点から考察したものとしてつぎの論文があるので参照されたい。

高木幸二郎「商品の価値と価格」, 飯田繁教授還暦記念論文集『インフレーション理論の基礎』

日本評論社, 1970年, 所収。

2) 相対的価値量の変動の叙述は、『初版』から『現行版』まで、内容からみるとすべて同様である。だが価値等式的具体例が異なっている。

『初版』では、最初に、40エレのリンネル=2着の上着 が例示される。そして等置される二つの商品の各々の価値量の変動による一商品の相対的価値量の変動の例として、40エレのリンネル=1着の上着, あるいは、40エレのリンネル=2着の上着, あるいは、40エレのリンネル=4着の上着, があげられている。

ところが、『第二版』以降では、最初に、20エレのリンネル=1着の上着 が例示される。そして相対的価値量の変動の例として、20エレのリンネル=1/2着の上着, あるいは、20エレのリンネル=1着の上着, あるいは、20エレのリンネル=2着の上着, があげられている。

『第二版』以降では、『初版』ではみられなかった「1/2着の上着」が等価形態に登場している。フランス語版『資本論』も同様である。(Le Capital, p. 21. 江夏・上杉訳『フランス語版資本論』24ページ。)

「1/2着の上着」については、周知のように、宇野弘藏氏をはじめとして氏の理論にしたがう人々の批判してやまぬ点である。1/2着の上着は使用価値でありえないから価値の表現手段たりえないとするのである。こうした主張の誤りについてわれわれはすでに批判を加えている。氏らの主張は価値の表現と欲望の表現とを混同し、価値表現における二商品の「等置」の意味を理解しないことからくるものである。

なお、『経済学批判』では、1/2ポンドの茶、1/2ポンドの茶、1/2ポンドのコーヒー、1 1/2エレのキャラコなどの例がみられる。(Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, M-E-W, Bd. 13, S. 26., und S. 31-32.)

拙著『価値形態論』青木書店, 1978年, 54-59ページ, 166-170ページ。浅野敏「『簡単な価値形態』の範式に関する一考察」『経済理論』第164号, 1978年, 所収, 参照。

3) Marx, Das Kapital, Bd. I, 1. Auflage, S. 15.

4), 5) Ebenda, S. 20.